

先人の思いを守り語り継ぐ

金俣小川用水記念碑

関川村長 鈴木久司書

金俣小川用水

例年より早めに始まった田植え作業は5月で終わり、田んぼには水が張られ、一面緑の夏風景になってきました。

今回は、稲作に欠かすことのできない農業水利を紹介します。

村には、多くの農業水利施設が存在します。江戸時代から多くの先人たちの努力によって整備されてきたものから、近代の土地改良事業による施設などが存在します。新潟県では、農業水利施設で農業・農村への貢献、歴史・文化的価値又は地域住民と密接な関わりを有している施設を知っていただくため、平成25年に「にいがた農業水利施設百選」を選定しました。村では、「金俣小川用水」と女川地区の「願人堀隧道水路・新堀用水路」が選定されました。今回は、農業者の減少や高齢化により維持管理が大変になってきている中、今もなお先人の思いを守り、語り継いでいる金俣小川用水を紹介します。



金俣小川用水の歴史

金俣集落の一段上に広がる^う谷地内は、ため池から水を利用して明治のころから少しずつ田や畑がつくられていました。大正時代には、何度も干ばつに遭い、配給米を受けることのある地区でした。

昭和10年以後になって、食料事情の悪化などから新田開発・米増産の必要性が叫ばれ、上谷地内30[㍉]の開墾が考えられるようになりました。

そんな中で、最も大きな課題となったのは用水源をどこに求

めるかでした。大石川や小川の水面と上谷地内では、50mから80mの高低差があり、小川上流の水を上谷地内に導入する考えはなかなか受け入れられず、「上谷に水をひける位なら、杵差の頂上にも水が引ける」と言われました。しかし、寄せ来る米不足と経済的危機に何もせずにはいられなかった金俣集落の人たちは、関係機関に集落の窮乏と用水の必要性を説いてまわりました。その熱意に動かされ、県が測量を引き受け、小川上流から水を上谷地内に導入することが可能であると実証されました。

その後、耕地整理組合を作
つて上谷地内の開墾計画が実
現にあたるころまで、話が
まとまりました。ところが、

いよいよ着工という時に、工
事完遂を不安に思う人たちが
脱会、最終的に金保集落の9
戸だけが残る形となりました。

このような非常に困難を極め
る状況の中、残った9戸の人
たちは、心一つにして、住
みよく、豊かな集落を目指す
ことを誓いあい、昭和18年に
工事を着工。

その工事は、いろいろな問
題にぶつかりました。固い岩
盤に隧道を掘る必要があり、
ダイナマイトが必要となりま
した。火薬庫がないためダイ
ナマイトの使用量1日分しか
貰えず、毎日村上まで取りに
行き工事を進めました。この
当時村上までいくとなると1
日ばかりであり大変な苦労が

ありました。ダイナマイト運
びは少なくとも160回以上
行われました。

様々な苦勞を乗り越えて2
年10カ月の歳月を要してよう
やく工事が完成（昭和22年）。
国や県の補助をほとんど受け
ずに開削されました。

このような苦勞を経て通水
した小川用水は、工事に携わ
った組合員のみが利用せず、
地元の耕作者全員に利用を認
め、地域に小川用水の恩恵を
広めました。完成後、幾度の
豪雨による被災がありました

が、用水路に携わった人々の
不撓不屈の開拓精神により、
見事克服復旧し今日に至って
います。

現在では、関係者総出によ
りえざらいなどの維持管理作
業を行い、大切に小川用水路
を守っています。



▲えざらいの作業を説明
する高橋秀夫金保小川
用水組合長



高橋秀夫金保小川
用水組合長

私は、開削作業の鍬入れの
年に生まれ、祖父も父も開削
作業に携わった。

平成7年に記念碑を建立し
た時は、私も発起人の1人だ
った。当時の鈴木村長や小川
用水開削の記録を書き記して
下さった右近次男先生がお祝
いに駆けつけて下さったのを
覚えている。

開削から約70年、「金保小川
用水」が持つ意義や価値も当
時とは変わってきている。こ
の用水を後世に語り継ぐため
にも、組合員だけでなく、受
益者全員と守っていかねばと
考えている。

農業は、今、先の見えない
大変な時期ですが、先人たち
の精神を見習い、住みよく、
豊かな集落にしていくために
みんなで努力していかねけれ
ばと考えている。

当時は、食糧難で小学4年
生の時に配給をもらいに行っ
たことを覚えている。作業に
反対する人たちもいて、大人
の対立が子どもにも及んでし
まい、小学生だった私はいじ
められ、いつも1人で登下校
していた。泣いて帰ると「泣
くな」と父親に怒られたこと
を思いだす。

また、冬山に作業用で建て
た小屋が雪崩にあつたことが
あつた。茅葺きの屋根だつた
ので、隙間から逃げるものが
出来て、父親が無事帰つてき
たときは、涙を流して喜んだ
のを覚えている。

私も年を取り、当時の苦勞
をわかる人が少なくなつてき
ている。今また、先祖たちが
強い意志でまとまつたように、
この地区の農業をみんなで考
え、まとまっていかなければ
ならないと思う。



当時小学生だった
高橋和雄さん



▲現在も急な斜面を歩いて作業に向かう

用水路が完成し、初めて通
水したのは昭和22年6月10日。
何もない時代にこの日のため
にとつておいた配給酒といわ
しの缶詰で、完成を祝ったそ
うです。取材をした4月17日
も江ざらい作業を終えたみな
さんに瓶ビールと缶詰が配ら
れていました。以前は、記念
碑の前で慰勞会をしながら、
金保小川用水の昔話をしたこ
ともあつたそうです。

金保小川用水のように村内
にある農業水利施設1つひと
つに、それぞれの歴史があり、
地域の農民、住民の想いが詰
まっています。先人の願いが
形となった地区の水利施設に、
思いを馳せてみてはいかがで
しょうか。